

学位論文題名

教科学習への社会相互作用論的接近

学位論文内容の要旨

本学位論文は、社会的構成主義の立場から理解と知識獲得の過程に及ぼす社会的相互作用の役割を理論的考察と、実証的資料の分析・考察の二つの側面から検討を加えたものである。

人間の発達や学習を他者との社会的な相互作用の過程のなかでとらえ、これら社会的相互作用の影響を受けながら発達が実現し、学習は成立していくという考え方は、かつてピアジェによってもとられ、またヴィゴツキーによって「発達の最近接領域論」として定式化されたものである。あるいは、母子相互作用研究やその他、ワロンなどの関係論的視点から発達を論じる研究者によっても人間の発達に社会的相互作用が果たす役割については強調されてきたことでもある。そして、近年の認知心理学や認知科学においても、人間の認識活動を社会・文化的な状況や文脈との関わりの中で論じようという発想から、協同作業や協同的問題解決といったグループ・ワークやコラボレーションの問題が取りあげられはじめてきている。しかし、他者と協同学習をすることが個人の理解や知識獲得の過程にどのような形で作用しているのか、個人の理解過程と社会的相互作用過程の動的な関係についての微視的な分析から明らかにしていこうという実証的な研究はいまだ少ないのが現状である。また、実証的な研究で扱っているグループのサイズもせいぜい数名の実験室的な協同作業や協同的問題解決のものが圧倒的に多い。

本論文では、第一には、児童の理解と知識獲得の過程を現実の教室で展開されている国語の教科学習の活動のなかで捉えることを試み、10数時間にわたる文学教材の読解過程を一人ひとりの学習者のレベルまで下ろしていくつかの資料を多面的に用いて把握しようとしたものである。第二には、これらの児童の読解過程が他の学習者との相互作用の影響をどのように受けながら、変容していったのかという社会的相互作用の過程として読解過程を捉えようとしたものである。従って、本書では学習者間の社会的相互作用の過程として読解過程をみていくと同時に、その相互作用の影響がどのように個人の中に内化され、自己内対話による読解深化が行われているのかを現実の教室の学習場面から明らかにしようとしたものである。

本論文では、具体的には以下の諸点について考察・検討を加えている。

序章では、発達と学習の問題を社会的相互作用論の立場から分析・考察することの意義について論じている。ここでは、ヴィゴツキーの発達理論を基礎にしなが、彼の社会・文化的な視点や「発達の最近接領域論」を発展させていく方向の一つに教室の中の学習者どうしの社会的相互作用についての微視的な分析と、社会・文化的な枠組みの中で社会的相互作用そのものを論じることの必要性を指摘している。

1章では、認知心理学の最近の動きとして、特にヴィゴツキー理論に多くを負っている精神への社会・文化的接近と、認識への状況論的接近を取り上げ、認知心理

学がこれまで前提にしてきた情報处理的接近や情報処理モデルを批判的に検討している。これに代わって、人間の認識の研究では、社会的構成主義的な接近を取ることの必要性を論じている。

2章では、文章読解を心理学や文学理論、さらにはバフチンの対話論をベースにして論じ、個人の主体的な読みの活動と対話的な場面の中に個人の読みを位置づけていくことの重要性を指摘した。文章を読み解いていくということは一人ひとりの読者の頭の中にもう一つの意味世界を作り上げていくことである。現実の国語の授業で使われている文学教材についての読解モデルとして、ここでは読者の意味構成の過程を重視した因果分析の考え方を基礎にしながらも、長文の作品全体にわたる読解形成の過程を扱うことができるものとして「包括的な知識構造」を併用した読解モデルを提案した。

3章は、学習を社会的な過程としてとらえる社会的構成主義の立場から対話による学習を論じているが、特に、相互作用的学习論についての最近の研究の動向を中心にしながら対話と相互作用が学習にはたしている役割について考察し、理論的展望と整理を行っている。実証的な研究として相互作用の過程についての微視的な分析と個人と集団との間の動的な関係をとらえていくことの必要性を指摘した。

4章では、実際の授業の中で展開された子どもたちの読解過程を述べている。ここでは子どもたちの読みの活動をいくつかの角度から追跡と分析を試みているが、教室の子どもたちの全体的な読解変化の方向に加えて、2人の児童のより詳細な読解過程を授業中の発言やワークシートに書かれた内容、授業の後のインタビューなどの資料などから明らかにしていった。

5章は、10数時間にわたる授業の中で展開された子どもたちと教師との相互作用の過程を追い、そこではどのような形が対話が展開し、また相互作用が一人ひとりの読解過程にどのように作用をしているのか論じている。ここでは、社会—いまここで直接問題にしているのは学級という一つの社会集団であり、そこで展開されている教室の学習活動であるが—は決して個人の学習活動という要素の単なる加算総和ではないことを実証的な資料から明らかにした。一人ひとりの学習者が他者の「読み」の影響を受けながら自己の「読み」を変え、また納得しながら「読み」を深めていったかその具体的な読解深化の過程を追跡・再現することができた。

6章では、子どもたちの相互作用の展開を規定しているものとして、教室の子どもたちの発言の階層性と教師の教授行為を取り上げた。教室の授業では、相互作用の展開がまったく自由に行われるのではなく、相互作用の内容と方向はシステムの構造的制約を受けている。ここでは、このような制約条件として、教室の子どもたちの発言の影響力やその役割の階層性と教師の授業展開・制御の仕方を取り上げた。

7章では、二つの別の学級の同一の文学教材の授業について、授業中の相互作用過程と児童の読解過程の比較・分析が行われた。ここでは、授業者の授業展開や話し合いの制御の仕方に大きな違いがみられ、授業中の相互作用のパターンにも明らかかな相違が生まれていた。ここには二人の教師の授業観や学習観の相違が背景に存在していた。この相互作用の展開の仕方の差異が児童の読解形成の過程にも影響を与えていることが明らかになった。

本論文では、①個人の理解・知識獲得の過程—具体的には文学教材の読解過程であるが—が、他者との社会的相互作用を大きく受けながら進んでいること、②他者の積極的な意見交流が個人の読解変化や読解の深化に大きく作用していること、③社会的相互作用が個人の読解過程に直接作用するばかりでなく、個人の内化の過程を経ながら時間的にずれを起こしながら効果を与えていること、④社会的相互作用それ自体が教師の授業展開などの外的な制約条件によって規定されながら展開していること、などを明らかにした。— 13 —

学位論文審査の要旨

主査 教授 若井邦夫
副査 教授 須田勝彦
副査 助教授 田中孝彦
副査 助教授 陳省仁

学位論文題名

教科学習への社会相互作用論的接近

一般に、教育心理学の成立はソーンドイク (Thorndike, E. L.) によるその名の著書の出版 (1903) に始まるとされている。爾來、ほぼ1世紀を経たが、従来、「教育心理学の四大領域は、第1に成長と発達、第2に学習、第3に人格と適応、そして第4に測定と評価である」という通念があり、教育実践の場で大きな比重を占める教科学習の問題は「その他の領域」に属するものとして副次的に扱われることが多かった。

しかし近年、ヴィゴツキー (Vygotsky, L.S.) の精神発達理論の再評価や認知心理学における「領域固有性」の強調、さらには発達研究における関係論的・相互作用論的視点の唱導に呼応して、教育実践に対して、より密に関わる形で認識の深まりや学習について心理学的研究を進めようとする動きが強まっている。

本論文は序章を含めて8つの章から成るが、前半の4つの章はいわば理論編にあたり、後半の4つの章が小学校国語科の授業を詳細に分析した実証編として、二部構成の形になっている。

序章では、従来の日本の心理学的研究の一つの基調をなしていた個人主義的心理学への反省をこめて、ヴィゴツキーの社会・文化的精神発達論と社会的構成主義 (social constructionism) の立場を中心に論じ、従来の教育心理学の不毛性の原因は教育の現場の中から教育心理学独自の課題と方法を探究して来なかったことによるとする城戸幡太郎の主張を引用しつつ、新しい観点から国語の授業という優れて実践的な問題にアプローチしようとする本論文の基本的前提を論じている。

第1章では、知識の「領域固有性」 (domain specificity) や認知機能の状況規定性 (situated cognition) に注目する最近の認知心理学の動きを展望するとともに、知識や理解は対人的相互作用の中でこそ得られるとする社会的構成主義の立場について論じ、教室という「学び」の場は新しい発想の認知研究にとって格好の研究フィールドであるとして、筆者自らの研究的立場を宣明している。

第2章は、文章読解に関する最近の心理学的研究の動向や「読者の復権」を唱える文学

理論及び「対話性」という概念を中心に言語の社会的性格を強調するバフチン（Bakhtin, M.M.）の所論をベースに、一つの新たな意味世界の構成としての文章読解における読者の主体的な読みと対話的相互作用の重要性を指摘し、また授業分析の方法あるいは基本モデルとしての「因果分析」及び「包括的知識構造」という新たな概念について解説している。

第3章は対話と共同学習をテーマに「足場づくり」（scaffolding）や「認知的徒弟性」（cognitive apprenticeship）などの概念について論述し、相互作用過程の微視的分析と「個と集団」の力動的関係の把握の必要性を強調している。

第4章は実証編にあたるが、ここでは『ごんぎつね』という文学作品について学ぶ小学校4年生の国語の授業を通しての読解過程をクラス全体と2人の子どもについて、授業中の発言やワーク・シート、授業後の面接などによって得られた資料を使って刻明に追っている。

第5章は、第3章における理論的考察を受けて、『ごんぎつね』を題材とした十数時間にわたる授業中の子どもと教師の言語的相互作用のパターンを独自に開発したカテゴリーを用いて分析した結果をまとめたものである。この分析の結果として、授業の進行とともに子どもの中で「ダイアローグ的発話」が増えること、時間の経過とともに「読み」の視点にさまざまな揺らぎが起こっていること、授業中の発言・対話と「読み」の深まりとの間には時間的なずれがあることなどを明らかにしている。

第6章では、6年生の説明文教材を扱った授業についての分析も含めて、対話を方向づけるものとして、子どもの発言の階層性や教師の教授行為など、授業にまつわる構造的制約の問題を論じている。

最後の第7章は、『ごんぎつね』という同じ教材を学習する異なる2つの学校のクラスの授業を比較し、教師の授業観や授業スタイルが子どもたちの相互作用や読みの変化に深く関わっていることを実証的に明らかにしている。

本論文は筆者の十数年にわたる実に精力的な研究活動の総括であるが、それらの研究で得られた知見は教育心理学会等で報告され同学の研究者の注目するところとなっており、また、本論文の骨子は最近単行本として出版されて、国語教育の実践的研究者たちからも高い評価を得ている。

本論文は、小学校国語科の授業における読みの成立と変容過程を教室の中での相互作用に照らして詳細に分析し、子どもの発言の階層性や教師の授業スタイルなどの構造的要因が読みの視点の「揺らぎ」や文学作品の学習を通しての一つの「意味世界の構成」に対して微妙な影響を及ぼしていることを初めて教育心理学的観点から明らかにした点に最大の特徴と価値があるといえる。

以上の点を評価して、本論文の著者・佐藤公治を北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。